



目次

- ▲論説 林業界の欠陥
- ▲研究 製炭法の研究
- ▲調査 檜笠製造に関する調査
- ▲文苑 木下清君を送らざる記 逝ける友、駄文駄話、叫び和歌
- ▲雑報 學校記事 校友會便り 寄宿舎通信 會員移動 其他

大正四年五月二十五日 第六拾七號 每星期一刊 治明四年七月十日 (第三種郵便物認可)

論説

林業界の欠陥 宇佐美周紫

題目が餘りに仰々し過ぎて一廉の林政學者にでもなつた様であるが實は其欠陥の部分に就て特に新卒業生諸君に希望を述ぶる迄の事であつて論理的問題には亘らないのを御断りする

漸く生れてから四十年に満たない本邦の林業(狹義に於ける)は勿論他の産業に比較して欠陥否不足の部分が多いのは無理もないかも知れない亦語を換へて云へば夫れ丈け前途望洋たるもので吾人の意を強ふする處のものがあるとも云ひ得る乍然各種の化學工藝が雨後の筍の如くに頻發するに係らず木材工藝の發達が尙遅々として雜木利用問題が今起り掛けて居るのや或は權力又は黨派の關係からつまらない道路が網の如くに敷設せらるゝに係らず林道の開鑿等と來てはんで考へても見ないものが多い現狀や若しくは農會の如く法定的に系統を立て、大日本農會から村農會に至る迄設備の完全せるに引換へて(内容の如何は暫く措き)治水治山は國勢伸興の重要案件である等と盛んに唱導せられながら尙系統的は愚

か私設の山林會すらもない貧弱なる獎勵機關の現狀や他の産業に比して金融設備の甚しく不足の事實やら農村振興上欠くべからざる林業經營上の欠陥を茲に述べるならば如何に遜色あり不進歩であり且又比較的世人の冷淡であるかを知るに難くはなからうと思ふ

吾人は不幸にして尙權力に乏しい或はあるものが見るならば如上の様な問題は蕞爾たる技術者が考へるべき問題でない云ふかも知れない然し之れを吾人は唯云ひ得るをうして語り得る書き得る時としては之れが救済を講じやうとは努力するが理想的の實行をなし得るには尙日の遠いものがある

何故に吾人は能はざるか(現下に於て思ふが如く)と云へば夫れは一言の下に答へ得る曰く其の人を欠く百の言論も千の玉論も其人を得ず其途を得なければ畢竟徒論に終るのは言ふ迄もないとこで余は其人を欲しい真に其人を欲しい

而して其人はあるいくらもあるたらうが又之を動かすべき人がなければ其人はあつても吾人の目的は達せらるべくもないところで僕は其人を動かすべき人を欲しいのである而して其の多くの人を欲しいのである

卒直に云へば吾人は愛知縣だかの農學校長を其卒業者が推薦して代議士に出した如くに吾人の眞意志を代表し得る人を輩出せしめて直接の手段を取りたいのは勿論では

あるが未だ其處までは吾人及び吾人の周囲を見るも六ヶ敷否殆んど出来得ない事であると信ずる

吾人が切言する處のものは前項の確固たる方針其事である勿論誰しもあやふやな態度で事に臨むものはなからうが其用意なる心ある人が言つたのを聞いたをうして少な

願はくば諸君官場十一年の回顧よりして不徹底かも知れないが敢て諸君の御注意を促したい老婆心から此の雑取な一書を呈するるのである

研究

製炭法の研究

其五、漸く一道の光明を発見す 校友諸君、昔から大發明をしたものも其發明の端緒は大底ツマラない事が多い、彼のワットが蒸汽機關を發明したのもフランク

こととした 處で明治四十五年の春であつた登校の途中炭賣りの婆さんが今朝此奥で炭小屋が焼けて居た……と話して行くのを一寸耳に挟んだ。氷室から突然火を發したと云へば兎も

複式自動製炭竈と云ふは其名稱の様に炭材の詰め替へを爲し多少の保護を加へたならば自動的の點火を爲し炭化せしむることが出来るのである、其炭竈の構造と製炭中の

の上げ木及炭材の一部は充分に熱せられて居るから若し其炭材が細木で水分の少ものであつたなら自然に火を發し竈口の方へ燃へて来るであらう又太き炭材で含水量の多

其六、複式自動製炭竈

も出てくるであらう以上は黒炭法即ち竈内消火法に用ゆる方法であるから煉炭を爲す時間も短く従て火氣を通ずる時間も長くない且つ又火力も弱くから充分に自動的點火の目的を達し難い場合もあると思ふが之れを白炭法即ち竈外消火法に應用したならば必ず充分に其目的を達し得るであらう然し白炭法に應用するには炭竈を三個尻合せに造らねばならぬから平坦地ならば兎も角山地では其竈地を撰定することが困難であるため先づ黒炭法に應用した方法を實驗することとして前記の様な計劃を立てたのである

調査概況

一、蘭、廣瀬の位置、地勢、戸數、人口、生産業との關係
蘭廣瀬は舊幕時代は蘭村と稱し獨立したるも現今は蘭區と稱し吾妻村の行政區劃を爲す東は下伊那郡上飯田村字大平區に接し大平時は其分水嶺なり西は大澤、押手前山、額付、各御料地及長坂私私有林等を隔て本村字妻籠區と大澤、柳樽各御料地を境し本郡神坂村に境す南は南澤、鍋割新道各御料地を境し下伊那郡清内路及小黒川に接す北は額付、袖むくり外四字

| 本籍現在者 | 本籍人寄留者 | | 他府縣同上 | | 合計 |
|-------|--------|----|-------|----|----|
| | 戸數 | 人口 | 戸數 | 人口 | |
| 男 | 14 | 36 | 1 | 3 | 15 |
| 女 | 1 | 3 | 0 | 0 | 1 |
| 合計 | 15 | 39 | 1 | 3 | 16 |

本谷長者畑人各御料地を境し讀書村に接す東西三里乃至五里南北三里あり地勢西南に面する村落は東西約一里に達し縣道大平線をはさみ蘭及廣瀬は稍市街の形をなす大山に至り大平線分れて里道清内路村に通ず大平線は明治三十九年に清内路里道は大正二年に改修の工を終り車馬を通ず大平線改修工事は縣事業とし三十六七萬圓を要したる大工事にして縣下に於て大正三年十二月末日戸數人口現在左の如し

| 田 | 畑 | 宅地 | 山林 | 計 |
|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|
| 反別地價収入高 | 反別地價収入高 | 反別地價収入高 | 反別地價収入高 | 反別地價収入高 |
| 4,870,640 | 2,123,011 | 4,566,340 | 2,035,040 | 13,594,031 |
| 2,500 | 50 | 375 | 1,975 | 4,850 |

備考 本表は大体を算出せしものに付き實際は多少増減あるべし

養蠶、運送業其他

| 笠製造高價 | 格 | 備 | 考 |
|-------|----------|------------------------------|---|
| 八五、三一 | 元、五、二、四五 | 目下の笠組合負債は本年度八十五万六千三百六十一圓のうち也 | |
| 人口數 | 一人平均額 | 備 | 考 |
| 一、九七六 | 二、五〇〇 | 工費は材料諸税を扣除せざるものに付き純益に非らず | |

二、槍笠製造沿革

蘭區創設年代は記録に残るものなきを以て詳ならざるも古老よりの口傳に因り調査するに凡う二百六七十前(慶安年代)他國より鍛冶と禰重の二人蘭に移住せしを始めて其れより増加して七戸となりたる時七軒町と稱し、姓を尾崎、原、北原、橋場とするもの、祖先、最も舊家に於て蘭村と稱するに至りしは長坂頂上に一位の大樹夥多あり其れより稱して蘭村と云ふ。現今に至るも古昔を物語る一位の大樹の根株を殘し(大津屋事尾崎達右衛門の屋敷地内にあり)後年十六戸となり十六軒町三十三戸となり三十二軒町と稱したるもの年を追ひて今日の多數となりしものなり尾州領以前は御天領に屬し土地の人民は樹種を問はず何れの山林にても各自必要に應じ立木を伐採利用せり交通の如きも中仙道開通以前は中津川町より神坂村に入り南澤の分水嶺を起し鍋割に降り廣瀬を経て本谷長者畑に入り與

川、伊那川を越したるものを後年妻籠より上段の村社前を通り「フカ」に出で折戸を越し(現今も尙トやぬけの頂上を廣瀬越しと云ふ)廣瀬に出で一方清内路に出する道路となり享保九年(今より百九十二年)辰の九月尾州藩の領地となり寶曆元年(今より百六十五年)始めて太平峠(改修以前の舊道)を開き(太平峠以東は飯田藩にて)吾妻橋より飯田町迄全通す木曾街道は福嶋に關所あり通行券を所持するものに非ざれば交通至難なるを以て老幼婦人の如きは悉く太平街道を交通し一名善光寺道或は簡單に女街道とも稱し春秋二季の如き善光寺參りの男女の旅行者續々相接し當時の旅籠屋と稱する宿屋に一夜百名以上の宿らざる無きの盛況を呈せりと云ふ故に沿道は多く旅行人を得意とし木柵製造の傍ら農業を營みしも今より百六十年前飛騨國より蘭村オチに移住せしもの始めて槍笠製造を業とするものあり當時之を稱して「オチベ」

笠と云へり(現今尙地名「オチ」と稱す)當時製造の方法は槍を割板となし小刀を以て之を削り笠に編みたるものなり後年に至り橋場某なるもの飽を用ひ槍を薄く突き出すの工夫を發明し其れより製造數盛況を呈するに至り然るに尾州藩に於て山林を領するに至り槍等の五木の伐採を禁じ金子若干を下付せられ其の當時の巢山と稱する井戸澤の一部より下ワル澤本洞迄及鍋割利右衛門澤より二百川迄南澤下ワル澤より現今の民林小屋橋場澤を除き其の他に於て藩より村民に對し拾万蓋の製造に制限せらる(當時は製造拾方に達せざりしと云ふ)該用材としてモミツガトウヒ等は公然其の伐採を許るされたり其の取締り方法は十萬製造の切手を渡され亦一方製造者には豫て印鑑を押捺し切手と共に白木番所に差し出し印鑑と對照通過せしめしものなり而して其の白木番所は妻籠の一石中津川町の上金及贊川の三箇所に設けあり一石と贊川とは福島番所より上金は尾州藩より役人出張せしものにして中津へ搬出するものは一石と上金に於て検査せしものなりと云ふ(當時飯田藩に於ては上飯田村萬蒲平に白木番所を置きて検査せりと云ふ)其の製造時期は冬季より八十八夜迄の間にし製造者は槍笠を悉皆又造らざる者

の材料を盡く庄屋方に集め材料は庄屋に預け笠は荷造りをなし庄屋の代頭と稱するものが検印し出荷する定めなりと云ふ右期間外には絶対に製造を許さず亦土地百姓は一人に付き一蓋の使用を許さず一も二蓋以上の所持を禁せらねたり(餘分の笠は部屋などに隠したりと此の嚴重なる制限は必ず山林濫伐防止の策ならん

第一とし楯、トウヒ、モミ、ツガ、ヒメコマツ赤松等とす樹齡は百年前前後のもの最上とし形態正しき圓形を最も良材とす如何なる良樹と雖も材料とすべき部分は無節に限る假令無節と雖も所謂「アチ」を稱するものは木質堅くして而も脆弱なるが故不適當とす同く無節と云ふも木理不整心頭(俗にヘンとも云ふ)片倚するもの心頭中心にありても根悪しく之れを打割る時は木理數條に裂け木の兩端より裂自相錯餘するものは多くの木屑を生じ極めて不經濟となるを以て是等を最も不適當とす以上の不良根を地方にては「ムシロ」根と云ふ亦俗に「シノレ」と稱し「ヒデ」とすればそれより折れ易きもの又「ヤニ」木と稱し木理中にヤニを含み其所より折れるものあり是等も適當の材料と稱するを得ず之れを總括して評すれば笠木の材料は一點の非難なき極端なる良材を要すると云ふ外なく國家經濟より云へば寧ろ不生産的の事業なりと評するの外なし

方の習慣上より云ふも春夏秋冬は多く農業養蠶の時期にして之れ等の業なきもの亦少なきものは他の町村へ出稼をなす好時期なるにより伐採時期は晩秋より初冬を適當とする所以にして古來より冬より八十八夜間を製造期とせしは謂ある事と推量するに難からず

のを二百板近く紙の如く削り疎製濫造の一六、原料價格以下左の如し

結果此頃の如き信用皆無の不幸を招けり

Table with columns: 原料價格 (百カキ), 製造ノ工程, 工賃, 卸直段, 小賣直段, 備考. It lists prices for various sizes of paper (e.g., 最高一五〇〇, 最低〇、三〇〇) and quantities (e.g., 明治四十四年度, 大正元年度).

八、從業者數 從業者は寄留者の一部と商業に従事するもの、外男女老幼(十四五才以上)盡く従事するを以て總計的に數量を掲上し難し

Table with columns: 名, 稱, 及, 各, 買, 上, 値, 段. It lists categories like 九、天、九、別、九、才、原、セ、ミ、ナ、シ、竹、入、チ、ヨ、ン、ボ、リ、二、天.

大正三年八十八夜より以後現今に至る下落買上げ直段左の如し

右は組合か其他のもの製造者より買上直段にして卸直段は百蓋に付き組合經費七五錢其外竹代糸代荷造運搬賃を合算するにより並九天百に付き五十錢以上を増す以上同ト

荷造り法は二百蓋を以て一本とす其方法は舊幕時代より「ミヤチ」と稱する器械を男子二人掛りにて二百づつ引きしめ容積を減じ強にて包み荒縄を以て結束一本に付き四貫匁此荷造貨蓋繩荷造り人夫賃共に十錢三留野驛迄運賃五錢三留野名古屋間二十二錢の運搬賃を要す

文苑

木下清君を送りざる記

住友別子鑛業所山林課の花形役者木下清君家事上の都合により引退し新居濱の地を去る侯店務を帯びて加茂村方面に出張し君が出發の首途を見送る事を得ず茲に不送別の記を草す

るを得たるは偏に君の餘徳たらすんばあらず僕君の馨咳に接する前後八ヶ年親しく君が人と爲りを知れり
君資性温厚にして篤實何人にも快く談じ特

め廻すとき突出せる頭腦回める君が眼底に映する所果して如何(四月十七日加茂の山中にて)

逝ける友

松樹庵

春雨につれて萌へ出で、秋風と共に凋落する草花にも實が結ぶ、千年の齢をも保つと稱する檜だとして遂には枯れる草花の一代も一代なら檜の一代も一代である、檜の材は尊いと云ふは人の言葉である其等自身には何等撰ぶ所なき一生ではあるまいか、けれ共檜は矢張り堂々として美しい、草花は淋しく枯れる姿が憐れである、三月號の附録を見ると卒業生名簿も第七回頃迄の分には必ず終りに幾人かの死亡と肩書せられた名前がある、學校を出て十年と云へば未だ若い盛りの人々であるのに早くも黄泉の客とならねばならぬ運命を以て生れて来たとは何たる悲しい事であらう、名前は大抵顔を

死亡と書くさへ痛々しいような美少年の名前もある、生者必滅と教へられても悟られぬ私には青雲の志を抱いて空しく黄泉の客となつたこうした若い人々の心と其周囲の人達の悲とを想ふ時に胸が暗く閉ざされてしまふ。
同窓も次第に多くなつて来た、何處に行ても一人や二人の同窓は居る様になつたが借て逢つて話して見ると學生時代の活氣も逢ぬ内に思つた懐しさも少しもなくて氣の塞るような人が多いのは如何したものだろう、後輩として服従を強いられたり、先輩として敬遠せられたり、小學校の修身書を忘れたかと皮肉られたりしても山林學校の蔓を手繰つて生きねばならむかと思ふところんな様を見ずに早世した友が美しいと思ふ同情に富める先輩の不遜な鞭を拜謝して努力せねばならむ官海五常の道を踏むだけ小供二人の父となつてから小僧扱にされねばならむ間とか稱するものも必要から全く遠かり得た逝ける友は生ける吾々を弔つて呉れることだろう。
近頃こんな事を云ふ人がある、山林學校卒業生の大部分を通じた氣質がある即ち山林學校氣質一名腰辨根性である、之は同じ腰辨の男の言葉である、私事旅行の旅費を請求して訂正させられたり、謝恩金を出すにも利害の打算を忘れなかつたり、收賄と云ふ罪名の下に處刑せられたりと例證一

憤慨に堪へなかつたけれ共無根の事のみでないのを如何しよう、實業教育の罪であるか、従事する仕事の罪であらうかはた修身書を忘れた爲めであるか知らないが先輩に禮儀を欠いた爲め、上官の鼻息を伺ひ得なかつた爲めでは斷じてあるまい、昔から上に諂ひ下に慢る人の不足を告げた時代はなかつたようである、蘇門同窓の事は知らず、乍併會山子の稽程一千日に折々先輩云云禮儀云々とある所を見ると吾々の同窓はよくの變人野蠻人の揃いで猿に教へる様な事を教へられねば出来ないのであるかもしらないでなくば會山子の御意を迎へないからとてこんな事を書かざるゝ會山子でもあるまいと思ふが吾々は先輩に頭が高かつたと云はれるよりも山林學校氣質など、こんな事を云はれ度くないと思ふ、餘り世渡り上手を心掛けた結果ではあるまいか、國亂れて忠臣を懐ふと云ふがこんな事を知くとまた逝ける友を想はざるを得ない、吾々の同窓だとしてそんな運中ばかりではない、挙げ来れば男の中の男も随分あるが私は其内の一人として下畑徳十君を挙げ度い、二十七才を一期として此世を去つた君の生涯は數奇傳中のものである、直情經行で俠氣に富だ君の短生涯は世渡り上手な眼からは失敗であろうとも所謂山林學校氣質に投する清涼劑として語るべき奇行に豊である、私は小閑を偷で君の思出を書いて諸君と共に

に其若き死を弔ふと共に吾が同窓の爲めに意氣を擧げ度いと思ふ。
下畑君に付ては交友ありし諸君に残れる印象をまた事實を左記へ御通信被下らむ事を御願致します。
福嶋町 川崎本雄

駄文駄話

K 生 投

長野縣林務課に多大の有形無形の財産があるとの噂を其儘
先づ安藤と言ふ名木がある随分大木で花は無論見事だが技葉が大したもので長野縣全体の森林を保護撫育してゐる殊に竹林を大切に居る大切な保護樹であるうだ、又佐藤と云ふ藤の木もある之は主として保安林の保護樹だうだ包圍と云ふ寶物があると思ふに國を包む寶だから森林だらうとの事だ、中山と云ふ大山あり西澤には美林あり鹽原には模範縣有林あり赤松の造林地は大したもの雜木林では栗林がある亦更級と云ふ月の名所を所有してゐるこれは山と野の境にあつて林野の區分をなして居るさうだ其外荒井と云ふ井戸あり高樋と云ふ樋あり水利を便にし治水上植林上大切な寶物であるさうだ、茲にハットクと云ふ變人がゐる何だか剽盜が博奕打ちの様だが實は苗木を養成して無代で呉れる慈善係りで大切

叫び

三 年 六 合 子

な寶男ださうだ、計へたら財産や寶物はまだ澤山あるうだが決して吹聴等しないから仲々容易に知れんさうだ林務課員にあつたら聞いて見給へ呵々
●ピットは廿四才にして宰相となりゲテは廿才にして不朽の名著ファストに着手せしと聞く「彼も人なり吾も人なり」とは抑も狂者の言葉か、吾等は如何にもして現在の凡態を改めざるべからず變化せよ向上せよ●天職を信し個人としての眞價を信じ自己の立場を確立し勇猛邁進せざるべからず吾等は一日たりとも全力を擧げ新天地に入る決心なかるべからず此轉變の世に何時火光が吾等の頭を襲ふかも知れず
●人生は大きな戦争場裡である故に戦はざるべからず戦はん爲に生れたならば勝たざるべからず勝たんに努力しなければならぬ努力は人生のシンボルである
●敢て新しい見解でないがフカノ、したる否定肯定を惜む「汝大に否定せよ然すんば大に肯定せよ」然し現代は不得要領な人物が仲々よき位置を占めてゐる殊に政界に多いやうださうも稜々たる一片の俠骨と珍瓏たる滿腔の清廉とは邪魔視せらるゝ様だ●現代の青二才は大に煩悶せよ死する迄煩

雜報

學校記事

水口農林生來訪 五月六日滋賀縣水口農林學校生徒三十餘名は中村教諭引率の下に來校參觀せるが信州の林業の概要に就いて北村本校教諭の話あり茶菓を饗し夜は本校三年生數名同生徒を岩屋旅館に訪問せり

北村教諭出張 五月八日開催の下高井郡木炭改良組合總會より講演を依頼せられたる北村教諭は同日同郡穂高村なる同會場に出立し製炭事業の改良法に就てなる題下に三時間の講演をなし翌日歸校せられたり

鶯のこゑをしるべにとひてまし梅さく宿のしるもしらぬも

なきかはすほじろうぐひす庭たき聲のあやをる春のあけぼの

見たるせば真木立つ山にかこまれて谷間あかるきやまざくら花

山のべのおくつきごころきて見れば春の日影に草はもむつ

大井川くだすいかだの筏師となりてしがな花のさかりを

ひとよきに梅もさくらもささちりて春はみちかきみ山べの里

ほととくと山鳩のこゑきこゆるやまの庵に歌をおもへり

山すうの畑うちをればほととくとありかもしらす山鳩のなく

麥の穂のやよきにばみてほととぎすはのかになる夏はきにけり

和歌

木曾の山人

舞雩詠歸の心を 子等と共に春のころもをよほひてゆかましものを山のいでゆへ

地及旅費等左の如し

二學年 (十日間) 宿泊地。名古屋、横須賀、東京(三泊)

旅費。拾貳圓(小使を除く) 日光、中禪寺、高崎、長野

引率者。西澤教諭、福山教諭

三學年 (十四日間) 宿泊地。二見、奈良、上市、大瀧、高野

口、和歌ノ浦、大阪(三泊)、岡山、高松(三泊)

旅費。拾六圓(小使を除く) 引率者。島内教諭、大場教諭

○遠足。五月十五日は本校創立記念日に相當すれども目下二三年生は旅行中にて在校するは一年生のみなるを以て當日は七宮校長始め居殘職員一年生を引率し寢覺の床に遠足を試み一日の清遊をなしたり。

校友會便り

長坂清人

白雲飛び罷んで陽春來る、黃鳥の枝間に轉じて春を報せしも東の間に梅の花も褪せ鶯の聲も亦古び候へ共櫻花は只今満開の姿にて其の爛漫たる艶容は當福嶋人士の氣を浮き立させ居り候、うらうらと光り長閑けき二十七日日頃鐵持つ事の慰め旁々新入會

員に取りては初回の辯論會の催し有之候、百五十の健兒の顔も常ならず輝き渡り後れ鶯の聲のなまめかしきも今日の盛會の前兆とも見るべく候ひき、櫻花園の男子は須らく此の花の中に酔ふべく歌ふべくと存候當に見頃の此の櫻の時節福嶋人士のみに蹂躪せられしは甚だ癢の種に候ひしも今日の催しにて大いに氣焰を擧げ吾等も其の仲間入り致し候朝から何んとなぐろはそはして落付かない健兒は八時のベルに續々とつめかけやがて七宮會長の開會の辭に依つて順を追ふて各々獨特の技倆を發揮致し壇上に種々の美花を飾り申し候珍らしいもの奇抜なもの多々の益々無限の趣味と兼ねたるものばかり殊に新入生諸君の演説には多大の興味もて謹聽仕り候いざ慎んで演題及出演辯士御紹介可申候

- ▲開會の辭 七宮會長
▲實力の修養 坂本 光太郎君
▲戦後と世界文明 平田 久良治君
▲擊劍部長として 加茂 憲太郎君
▲日本國民の缺點 鈴木 繁君
▲優勝劣敗 星加 正雄君(新)
▲庭球部長として 千田 政美君
▲怒濤 和田 實也君(新)
▲學生は何が爲に學ぶ 矢崎清海君(新)
▲國民の覺悟 喜多村 弘君

▲貯蓄 岡西 猛君

▲新學期に對する覺悟 小澤安親君(新)

▲弓術部長として 千村 彌之助君

▲校友會に對する我希望 川口 勇次郎君

▲勇氣 小澤 武君

▲小禽の智 宮嶋 岩見君

▲衝突せよ! 古畑 今朝茂君

▲對支外交論 山下 不二三君

▲閉會の辭 七宮會長

後から後からと出づる辯士の興味は限りない底を有し何處まで行くも盡き不申盡きしものは只タイムのみ殊に此次には晝飯を兼ねての觀櫻會を小丸山に催すとの事なれば名残り惜しくも拾一時半頃閉會の辭に辯論會のさばりは下され候新入生入りて始めての催しなれば新しい辯士の顔振れも多く何れも興味律々の裡に百五十の健兒意氣頗る昂く吾知らず卓を敲いて快哉を叫び拳を握つて片唾を呑み眞面目に謹聽仕り候

寄宿舎通信

小澤 武

久しき沈黙の冬にありたる會山も漸くに近く佐保姫の輿に梅花先づ春の名乗を擧げ

(可認物使郵種三第) 號七拾六第

候てよりは一日々々の暖かさにて此所沈思の情態にありたるも旬日ならずして華なる春の天地と變じ申し候
 去る二十三日三十有余名の寮兄と惜しき袂別の悲しみに遭ひたる生等は俄に襲ひ來る暗愁の高度の寂寞とに快快として寮窓に去られし兄等を偲び申し候が僅かに二日より開始せられたる實習の疲勞に幾分の愁を薄らぐる有様にて候ひし
 六日には室長の任命七日には室替有之生等の氣分も漸く緊張し參り候
 かゝる中にも時の流は愈々進みて十五日には新入舎生の歡迎會に卓上の蜜柑の圓さが如くに鎖されたる舎の空氣は此に洋々たる歡樂の海に躡し申し候
 嬌々たる會谷の春風は飄蕩たる霞を共に生等が最高度の陽氣なる情操を喚發せしめ梅花香に誇りて未だ幾許ならざるに早くも櫻花の頃と相成候
 生等の樂しき觀櫻のつごいは琴平山に於て催され候時は四月二十四日の午後三時天は晴れもやらの花曇の折から小丸山なる官民聯合の觀櫻會に相對して大に胸襟をくつろぎ申し候
 カレンダーに五月の聲を聞いて生等の旅行熱は俄に高潮に達し申し候殊にたし迫りた

今日此頃の朝夕机邊の話題はそれのみにて夜毎の夢さへまごかならぬ程に御座候實習は十日に終了致し毎日炊かれたる浴漕は隔日に生等の汗を拭ふ事と相成候検査の鈴の半鐘に化し時々聞き馴れぬ生等が胸を轟かす事と舎の周圍に潤葉針葉樹の愈々多くなりたる事とは新入舎生の入舎と共に一新したる寄宿の面目に有之候
 降りて止み止みて又降る春雨に演習林の落葉松は一段一段に縁を加へ哈々たる蛙聲は黒川の水音に和して寮舎の春は漸くに老け早月も早半と相成候
 (蛙聲を聞きつゝ、十五室にて)

會員移動

○吉田佐十郎君は今回鳥取縣林野課に轉任せらる
 ○西野入徳君は數年間林業技手として朝鮮總督府に奉職せられしが今回方向を轉じ宗教哲學研究の目的を以て、數年間歐米に留學の筈にて六月中横濱出帆先づ米國に向はるゝ由
 ○今井安男君は縣下飯山小林區署に轉任
 ○本年卒業生にして任地決定既に赴任せられたる諸君左の如し
 秋田縣大曲小林區署 吉川 眞夫君

秋田縣荷土場小林區署 中村 五郎君
 秋田縣能代小林區署 松澤 敏男君
 高知縣奈半利小林區署 大森 悅君
 茨城縣大子小林區署 荻原 惠治君
 茨城縣太田原小林區署 宮澤 功君
 福島縣原町小林區署 飯沼 要人君
 鳥取縣鳥取小林區署 恩田司馬之助君
 長野縣小林區署 柳澤 得村君
 長野縣廳林務課 黑崎 洋治君
 高知大林區署 水上 壯三君
 同 上 小崎 次郎君
 尙前號に帝室林野管理局に奉職すべき者の中田中泰吉君を洩したれば茲に附記す但し管理局の分は學校より推薦せしみにて未だ採用確定せしにはあらず前號決定せし様に記せしは記者の誤につき併せて訂正す

大正四年五月廿三日印刷
 大正四年五月廿五日發行
 (定價三錢)

長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地
 編纂兼發行人 安井 正夫
 長野市南縣町已三番地
 印刷者 田中 彌助
 長野市西后町乙二十一番地
 印刷所 長野新聞社活版部
 長野縣西筑摩郡福島町二八九番地
 發行所 蘆澤書店